

南アフリカとアパルトヘイト

熱狂的な観衆の嬌声とブブゼラの騒音に明け暮れた FIFA ワールドカップ・南アフリカ大会も終った。大会前に世界中にこれほど多くの話題を提供したビッグ・イベントも珍しい。南ア政府はマンデラ前大統領のアパルトヘイト撤廃に至る功績を褒め称え、負の遺産である恥部を隠して新生南アの発展と限りない未来の可能性を徹底してPRすることに努めた。アパルトヘイトの非人道性を訴えながら、今やそれを克服しつつあることを懸命に世界に向かって発信したのである。人種差別撤廃と万民平等の声が大きくクローズアップされたのもワールドカップの効用であろう。

人種差別政策が排除されることは、今日常識的に考えれば誰しも歓迎するはずである。だが、公然とは表面化していないが、かつて私が直面した場面に似たような南アの一部の人びとの気持ちが、今でも実際に受け入れられていると囁かれている。

1992 年 4 月アパルトヘイト廃止前の南アを訪れた時、偶々米国ロサンゼルス市内で白人警官が集団で黒人を暴行する事件を引き起こし、その衝撃的なニュースは世界中に伝えられ、米国とロス市警は世界中から激しい非難を浴びた。ところが、その時ガイドを務めてくれた南アの黒人青年は、アメリカでもアパルトヘイトをやっていたら、こんな無様な事件は起きなかったと平然と言い放ったのである。

さらに数日後、ヨハネスブルグ市郊外にある金鉱山の地下 1800m の鉱床まで潜り、そこで掘削作業中の黒人鉱夫数人にアパルトヘイト制度について尋ねてみたところ、彼らも毅然として制度に賛成だとはっきり応えてくれたのである。彼らの真意は想像するしかないが、内々にはこのように国際世論とはかけ離れた南ア人独自の考えもあり、それは一般には思うように伝えられにくいということを感じられた。

あれから 20 年近くが過ぎ、その間にアパルトヘイトは撤廃され、国際社会の目も厳しくなり、南アも変わった。しかし、テレビで伝えられてくる熱狂的な声の陰で、今も残る貧富の差を思うと南アの人びとの本当の気持ち、とりわけ黒人たちの本音は果たしてどうなのか、今なお気にかかってならない。

(近藤)